

患者は新義歯を問題なく使用していた。また、口腔内の変化は見られなかった。

V. 考察

新義歯は口腔内で十分な吸着が得られ、適合も良好であった。本症例の主訴は、人工歯の摩耗であり、適合に問題はなかった。したがって、新義歯の製作に際し、旧義歯の外形を残しつつ、新しい人工歯を配列することが主訴の改善になると考えられたため、Silicone-Model-Systemを採用した。この方法で製作した個人トレーは、旧義歯と同様の形態になっており、印象採得時に口腔内に旧義歯の入った状態に近い環境での印象採得が可能だったことから、印象採得が確実にでき、良好な適合が得られたと考えられた。

また、旧義歯の人工歯は著しい摩耗が認められたが、新義歯では咬合面形態が明確な人工歯に改善され、咀嚼効率の良い状態が得られたと思われた。加えて、旧義歯の配列位置、床辺縁を参考にしたことで新義歯の外形もほぼ同じ状態に再現できた。これらも、患者の新義歯の受け入れやすさにつながったと考えられた。

以上の結果から、本症例にSilicone-Model-Systemを応用したことは、主訴に対して適切に改善できたといえる。

VI. まとめ

患者の口腔内を真近で観察することにより、義歯と周囲組織との解剖的、機能的調和が、小帯の走行位置や口腔の動きに関連して理解できた。患者との直接会話が義歯の使用状態などを含め、模型上だけでは判断することができない情報をもたらし、義歯製作に反映する効果を実感できた。

参考文献

- 1) 伊藤圭一, 野村章子, 丸山 満, 本田岳史, 高見大介: 研究用模型に技工用シリコン印象材を用いた新しい試み. 補綴誌, 49・113回特別号, 133頁, 2005
- 2) 伊藤圭一, 野村章子, 山田一穂: silicone model systemによるスタディーモデルと個人トレー製作. 歯科技工, 34 (4): 488-497, 2006

視覚障害者の義歯治療における歯科技工的配慮

明倫短期大学 歯科技工士学科専攻科
生体技工専攻2年生 小林 亘

I. 症例の概要

歯科治療を円滑に進めるためには、患者とコミュニケーションを図りながら、治療内容について十分な理解を得ることが必要不可欠である。今回、視覚障害を有する患者の上下顎義歯の症例において、見学に加えて患者と十分なコミュニケーションから得た生体情報を補綴物に反映させることを理解したので報告する。

[患者]

82歳, 女性,

[主訴]

上顎の総義歯が外れやすく、下顎部分床義歯も含めて義歯新製を希望 (図1)

[全身所見]

既往歴としては、視覚障害のため移動の際に誘導する付き添いが必要で、日常生活では専用の拡大鏡を使用している (図2)。

[口腔内所見]

残存歯は3のみであり、顎堤形態では両側に著明な下顎隆起が認められた。

II. 義歯の設計方針

今回の症例は、治療の開始段階で旧義歯と同じ金属床を勧めたが希望せず、修理も困難であることか



図1 旧義歯

らレジン床義歯とした。

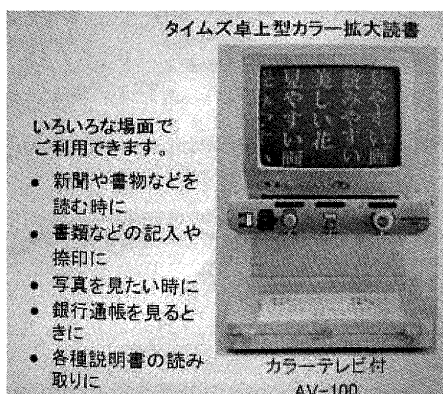


図2 拡大鏡の一例
(ロービジョンのホームページより引用)

患者への負担を軽減するために、Silicon-Model-System¹⁾を応用し、旧義歯形態を代用した個人トレーによる印象採得を行うこととした。

Ⅲ. 技工術式と治療内容

1. 個人トレー製作

Silicone-Model-System¹⁾で模型を製作するにあたり、上顎は無歯顎でシリコン模型の製作は通法どおりであるが、下顎は部分床義歯のため³⁾残存歯の形態を再現する必要があった。そこで、石膏で製作した研究用模型(図3-1)の残存歯を技工用シリコン印象材(タイタニウム, セルマック社)で印象採得し(図3-2)、内面に常温重合レジン(プロビナイス, 松風)を填入してレジン歯型を製作した(図3-3)。このレジン歯型を旧義歯に装着し、技工用シリコン(タイタニウム, セルマック社)を圧接してシリコン模型を製作後(図3-4)、個人トレーを完成した²⁾。

2. 下顎維持装置の設計, 製作

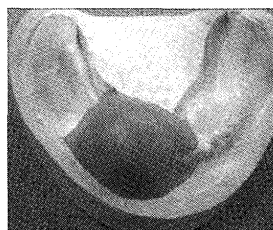
旧義歯の維持装置に特に問題はなく、鉤歯である残存歯にも目立った所見はなかった。また、視覚障害をもつ患者であるため、口腔内での感覚は健常者に比べて敏感であった。以上のことを踏まえ維持装置は旧義歯と同様のエーカークラスプとした。

3. 蠟義歯試適

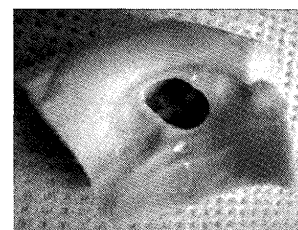
蠟義歯の口腔内試適において、患者は視覚障害のためチェアサイドでの人工歯配列を確認できないことから、歯科技工士が試適時の口元の写真を撮影し、資料を用意した(図4)。患者の要望により、カラー印刷せず白黒印刷とし、自宅の専用拡大鏡(図2)



図3-1 研究用模型の残存歯



シリコンによる印象採得



印象面

図3-2 研究用模型から印象採得されたシリコンコア



図3-3 下顎残存歯のレジン歯型と下顎旧義歯

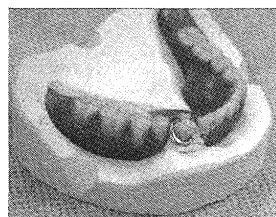


図3-4 レジン歯型で残存歯を再現した下顎シリコン模型

で確認をしてもらったところ、「歯がきれいに並んでいた」との患者のコメントから、審美的な満足が確認された。

4. 完成

蠟義歯試適時は、適合に問題が認められなかったため、義歯床用アクリリック樹脂(アクロン, ジーシ)を填入後、低温長時間重合(75℃, 8時間)を行った。重合後開輪し、通法通り研磨を行い完成し

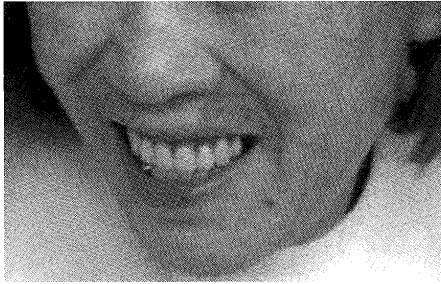


図4 拡大鏡で確認してもらった資料
(試適時の口元の写真)

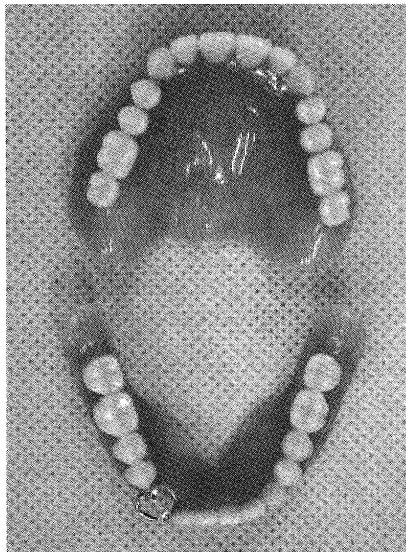


図5 完成した新義歯

た(図5)。

IV. 経過観察

新義歯の装着直後は、「義歯を装着していると疲れやすくなる」という訴えがあったが、咬合調整や顎堤への過圧箇所の削除により上下顎の義歯は良好な適合が得られたので、患者は満足している。

V. 考察

「義歯が外れやすい」という主訴は新義歯により改善された。しかし、旧義歯の金属床と新義歯のレジン床との材料的な違いが義歯の適合性に影響するかどうか確認するために、それぞれの義歯の重量を比較した。旧義歯は25.3g、新義歯が13.4gで11.9gの軽量化が確認された。金属床はレジン床より床の厚さを薄くできるという点から口腔内装着時の違和感の軽減や、熱伝導性が良い長所はあるが、その重さが原因となって適合性を低下させる場合もあることがわかった。今回は患者の要望もあり、軽量のレジン床義歯を製作したが、違和感もなく満足が得られた。

視覚障害をもつ患者に対し、Silicone-Model-Systemを活用することで、来院回数が減り、旧義歯の形態が反映されることから、チェアサイドにおける義歯調整の時間短縮が可能となった。また、試適時の口元の写真を自宅の拡大鏡で確認してもらうことにより、視覚障害者においても審美的な満足を得ることができた。以上のような配慮から患者の負担が軽減でき、受け入れ易い義歯を提供することが可能であった。

VI. まとめ

今回の症例を通して、個別に対応する治療法とそれを支える技工上の工夫点の重要性を認識することができた。そのためには、患者と十分なコミュニケーションを図り、そこから得た情報を補綴物に反映させることがキーポイントであると考えられた。今回の患者担当制の実習から学んだ貴重な経験を今後の歯科技工に生かしていきたいと思う。

参考文献

- 1) 伊藤圭一, 野村章子, 山田一穂: silicone model systemによるスタディーモデルと個人トレー製作. 歯科技工, 34 (4): 488-497, 2006
- 2) 松本崇臣, 野村章子, 伊藤圭一, 丸山 満: silicone-model-systemの多数歯欠損症例への応用. 日歯技工誌, 27 (2): 219, 2006